

# 令和3年度 第3回ニセコ町観光審議会 議事録

## 1 日 時

令和3年(2021年)11月16日(火) 14:00~16:30

## 2 場 所

ニセコ町役場1階 多目的ホール

## 3 出席者

委 員 下田委員(会長)、菊井委員(副会長)、岩崎委員、高井委員、大橋委員、石黒委員、若杉委員、谷田委員、高久委員、ランド委員、尾形委員、中川委員

調査委託先 公益財団法人日本交通公社 観光地域研究部 環境計画室 中島室長  
公益財団法人日本交通公社 観光地域研究部 環境計画室 岡本研究員

ニセコ町 商工観光課 斉藤課長、高橋参事、谷井係長

小樽商科大学 後藤准教授、大湊

## 4 内 容

### (1) 下田会長挨拶

前回の意見交換でも、委員の皆様から有意義な意見をいただいた。コロナ禍も落ち着きを見せ始め、1年半ぶりに出張した。ニセコ町外に出ると、よりニセコ町の良さを感じる。今回も前回同様にそれぞれの立場から思っていること、将来どのような地域にしていきたいか、忌憚のないご意見をいただきたい。

### (2) 議題

#### ① ニセコ町における観光についてのアンケート結果(速報)について(JTBF 中島)

先日実施したアンケート調査の結果について報告する。今回は速報版だが、整理したものを後日共有する。また、12月のまちづくり町民講座でも報告させていただく予定だ。

調査概要については、調査対象をニセコ町住民の20歳以上男女とし、アンケート配付数は2,000通、配付先は住民基本台帳から無作為で抽出した。結果として回収数は680通、回収率34%と、この手の調査では高い回収率と考えている。性別、年代、居住エリア、居住歴、家族構成、職業などに関わらず、偏りなく幅広い属性から回答を得られた。

アンケートは基本日本語表記の紙で配付したが、回答しやすいようにQRコードを掲載してwebでも回答可能とした。同時にweb版では英語表記も用意した。結果として、紙で回答された方が80.3%、webで回答された方が19.7%、そのうち3.1%が英語での回答であった。

単純集計では、新型コロナウイルス感染症の影響拡大前、ニセコ町内で観光客を見かけた(よく見かけた、ときどき見かけた、の合計)と回答した人は、国内客に対して87.9%、海外客に対して78.1%と、多くの町民が観光客を見かけていたことが分かった。ただし、新型コロナウイルス感染症の影響が拡大している現在では、国内客に対して72.1%、海外客に対して20.3%と、特に海外客を見かけると回答された割合の減少幅が大きい結果となっている。

ニセコ町に観光客が訪れることに対して、前向きな意見（賛成、まあ賛成、の合計）が国内客に対して83.9%、海外客に対して70.2%と、町民の多くが観光客の受入に賛同している一方、海外客に対しては後ろ向きの意見（やや反対、反対、の合計）が11.2%あり、町にとっての観光の重要性を認めつつも、特に海外観光客の受入にやや抵抗を感じている層も一定の割合でいることがわかる。なお、観光客の望ましい受け入れ人数に対しては意見が分かれた。コロナ前より増えた方が良いとする意見（もっと増えると良い、少し増えると良い、の合計）が国内客に対して54.3%、海外客に対して37.2%、コロナ前程度が良いとする意見が国内客に対して33.2%、海外客に対して35.7%、コロナ前より増えない方が良いとする意見（あまり増えてほしくない、増えてほしくない、の合計）が国内客に対して12.5%、海外客に対して27.0%となり、意見がそれぞれ分かれる形となった。

ニセコ町の発展に観光が重要な役割を果たしていると思う人（とても思う、やや思う、の合計）は85.2%を占める一方、思わない人（あまり思わない、まったく思わない、の合計）は4.8%に留まっており、多くの町民が観光の重要性を認めている結果となった。ただし、観光の発展により自分自身の生活が豊かになると感じられている人（とても思う、やや思う、の合計）は38.9%に留まり、町にとっての重要性と自身の生活との間に乖離が見られることがわかった。

また観光客が訪れることによる生活環境への影響としてあげられたのが、第1位「地域経済、雇用、地域産業が促進される」（53.3%）、第2位「新型コロナウイルスの感染リスクが高まる」（42.2%）、第3位「騒音やゴミの増加等により、生活環境が悪化する」（38.8%）であった。

これら回答結果を、その属性よっての意見の違いを分析するため、年代や居住地別でクロス集計を試みたのが出力用クロス集計(1)である。

観光客と接する機会については、日常業務の一環で接していると回答したのは、20代41.0%、30代44.8%と高く、接する機会がないと回答したのは60代では48.5%、70代61.7%となった。また居住地別では、川北地区住民が観光客と接している割合が54.2%となり、一方で、観光客と接する機会がないと回答したのが50%を超えたのは有島地区、市街地区、南西地区であった。この傾向は、観光客を見かける割合についても同じだった。

ニセコ町への観光客来訪については、30代、40代が共に、賛成が国内客に対して60%以上、海外客に対して45%以上となっており、居住地別では川北地区住民が国内客に対して66.4%、海外客に対して51.3%と回答している。一方で、有島地区住民においては、海外客来訪に対して8.2%が反対と回答しており若干ではあるが高い数値となっていた。この傾向は、観光客の受入人数、観光の重要性、自身の生活への影響、それぞれの問いに対しても同様であった。

次に、属性ではない、業務などで普段から観光客と接している人とそれ以外、観光の重要性を認識している人とそれ以外の意見の違いを分析したものがクロス集計(2)である。

観光の重要性を理解している人にとって、ニセコ町への観光客来訪は国内海外問わず60%以上の賛成と高い数値であるが、重要性を認識していない人（あまり思わない、全く思わない、と回答）にとって観光客受入はやや反対、反対と回答する人の割合が全体の数値よりも多くなっている。これは受入人数、自身の生活影響についても同様の傾向になっている。この調査で、観光の重要性に対する意識の違いが調査結果に大きく反映されていることが分かった。

## ② ニセコ町における観光由来の二酸化炭素排出量 試算結果（速報）について（JTBF 岡本）

二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)排出量の削減に向けて、2020年7月には2050年までの温室効果ガス排出実質ゼロを目指すニセコ町気候非常事態宣言を行った。2021年11月にはCOP26にてグラスゴー宣言に署名し、観光業のCO<sub>2</sub>排出ゼロを目指すことを決めた。日本としては2030年までに2013年度比でCO<sub>2</sub>排出46%の削減を目指している。

近年、グローバルでも消費者の環境意識が高まっていることから、CO<sub>2</sub> 排出量を「見える化」するためのサービスが開発されている。観光業は、全産業の中で CO<sub>2</sub> 排出量に占める割合が約 8%、そのうち 49%が移動による排出である。そこで、ニセコ町における観光由来の CO<sub>2</sub> 排出量の「推計」を行うことで、今後の排出量削減に向けた取組成果の見える化や将来の目標設定につなげる。また今回は「北海道内での移動」に関しての CO<sub>2</sub> 排出量に着目する。この試算に当たっては、ニセコ町観光統計をグリーンシーズン（5 月-11 月）、ウィンターシーズン（12 月-4 月）ごとに整理、また既往文献、web 等での公表データを使用して実施した。

新千歳空港からニセコ町までの移動手段において自動車全てがガソリン車だったと仮定すると、自動車の場合、CO<sub>2</sub> 排出量は年間合計で 31,745 トン、バスで 7,762 トン、鉄道で 759 トン、総合計 40,265 トンとなった。次に、自動車以外のシェアを変えず、自動車をガソリン車からハイブリッド車へと変えた場合、CO<sub>2</sub> 排出量は 23%減少の 30,929 トン、電気自動車へと変えた場合は 51%減少の 19,725 トンとなった。また別に、全ての移動手段シェアを変えた場合では CO<sub>2</sub> 総排出量が 24%、9,500 トン減少の 30,799 トンとなった。CO<sub>2</sub> 排出量における 9,500 トンは、杉の木で閑散すると約 68 万本が 1 年間に吸収する CO<sub>2</sub> 量、排出削減クレジットで換算すると約 7,300 万円分となる。

CO<sub>2</sub> 排出量に対する見える化の取り組みは企業や行政だけではなく、観光客自身にとってもツールが提供され始めている。例えば、旅行時に排出される CO<sub>2</sub> の量が即判別できるようになり、オフセットするために支払う料金が CO<sub>2</sub> 排出プロジェクトに寄付されるなども仕組み化されている。

今回はあくまで試算であり、より正確に排出量を把握するためには、聞き取りなど各種調査を実施する必要があるが、正確な排出量が把握できれば次の目標設定に寄与することが可能である。いずれにせよ、町や企業だけで取組のではなく、観光客自身にも意識して取り組んでもらえるような仕組みづくりが重要である。

### (3) 意見交換

#### ① ニセコ町における観光についてのアンケート結果（速報）について

##### 〈石黒委員〉

属性のクロス集計、Q6 では国内客増加に関して、「あまり増えてほしくない」の回答が 20 代と 30 代で大きく違うように見える。20 代と 30 代で違うのは、町民皆さんの実感に近いものなのか興味深い。この違いは皆さんどう捉えるのか、町の発展にどう影響すると考えているか。今後の 10 年間のビジョンを考えるのであれば、現時点で回答されている方々の年代はそれぞれ 10 年上がっていくので、年代別の違いや思考をしっかりと見た方が良いと思う。

##### 〈中島室長〉

そもそも 20 代の回収数が 40 ほどと少ないので、あまり詳細に触れなかった。現代の 20 代は上の世代と行動・意識が変わっているとも言われているので、もう少し深掘りさせて欲しい。

##### 〈石黒委員〉

20 代以外でも、例えば 50 代と 60 代で数値が違う。自分が関与している道内の他地域と比べると、若年層と高齢層の差異より、10 歳ごとの差異が目立つ点が興味深い。

##### 〈中川委員〉

アンケート全体では、観光の重要性に関する結果が 1 番共感したポイントである。自分自身

は介護タクシーを仕事としているため、ほとんど観光に携わっておらず、観光客増加の恩恵に預かっていない。一方、例えばスキー場に行ったときにリフト券や昼食代の値段がこれまでより上がっており、スキー場の利用者も多いとなると住民として楽しめない。

#### 〈後藤准教授〉

観光客の受入は、町にとってと自身の生活にとってという部分においては、皆さんの実感通りなのではないか。物価に関しては、どこの目線で考えるかで変わる。町民としてはスキー場など物価が高いと感じるだろうが、オーストラリア人から考えると自国と比較すると高いわけではない。誰を対象に設定するのが重要だと考える。

#### 〈若杉委員〉

気になったのはアンケートの回収率である。回答した方が 34%なので、回答しなかった残り 66%の方々の意見が聞きたい。アンケートに回答してくれる方々は基本好意的なので、回答されたもので町民の意見全てと判断して良いのか。34%の回収率は良かったのか。残りの回答してない人の意見を今後探っていくべきではないだろうか。加えて、配付と非配付の属性とクロス集計も出来ると良い。10年後のビジョンを考えるので、第一線で活躍していく、これから成長していく年代の声にフォーカスしていくことが重要ではないか。

#### 〈高橋参事〉

町民 5,000 人に対し、無作為抽出で 2,000 人配付したところ、多くの町民の皆さんから回答いただいた。通常のアンケートの場合は、回答期間を長く設定し、未回答者には督促ハガキを出すなどしているが、今回は 2 週間程度と回答期間が短かったため、督促ハガキは出さず、その分、配付数を多めに設定した。今回のようなアンケート調査の場合、他市町村では 10%くらいの回収率が通常であるので、34%の回答率はむしろ高いと感じている。

#### 〈石黒委員〉

私が調査を行っている道内の別自治体では、同じようなアンケート調査の場合、全戸配付で約 8,000 通、そのうち 1,300 通ほどの回収だったので、2 割弱程度の回収率であった。

#### 〈後藤准教授〉

回収出来なかった残り 3 分の 2 の意見については、町民講座などで住民との接点や説明の機会を設けていくしかないと思う。

#### 〈若杉委員〉

アンケート実施から期間をおかずに、例えば商工会や町内会の集まりなどに役場の人間が行って、観光についてどう思っているか、10 年後に住民の皆さんと観光がどのように接続されていくのが望ましいか、希望を聞くのが重要だと思う。住民にとってプラスになるような取組がなされて、住民が観光に対して明るい気持ちを持って接してもらおうようになるよう、町の努力が必要だと思う。

#### 〈高橋参事〉

今回のアンケート調査の結果をフィードバックする場として、町民講座を実施する予定だ。

### 〈大橋委員〉

観光が必要だと思っている人の割合が多いのは良かった。恩恵を受けていると感じる人の割合が少ないのが課題だと感じた。30代と40代が観光客に対して寛容なのは、自分もそうだがこの世代は移住者が多く、ニセコに魅力を感じて移住しているからかもしれない。また、ニセコに住むきっかけの質問で、「どうしてもニセコ町に住みたかった」と回答された方が92人というのは高い数字だと感じた。一方、川北地区の人が観光客に対して寛容なのは何故なのか気になった。その逆で、有島地区で反対者が多いのは記念館や農家が多いからなのか気になるところである。

### 〈後藤准教授〉

川北地区はリゾートエリアであり、観光客と生活圏が近いからだと考えられる。またクロス集計では、ニセコ町の在住歴や移住年数での違いを分析した方が良いと考える。

### 〈高井委員〉

焦りを感じたのは、若年層が観光関連業界で働く意向が低いことだ。コロナ禍が終わってコロナ前の状態に観光入込が戻った時に、働き手が足りている施設はないと思う。

そもそも回答してくれた人は観光に好意的なはずなのに、働く場所として観光業が選ばれないのは問題である。今後、働く場所として選ばれる努力をする必要がある。今週実施した弊社の採用面接では3件中2件が高年齢者（60歳）で、定年退職後の再就職であった。年齢は60歳だが、ニセコの観光に興味を持っている方々である。労働者の年齢が上がっていくのは日本全体の傾向でもあるので、その中で若手にも働く場所として選ばれつつ、年齢が上がっても働きやすい仕事場にすることが重要である。いずれにせよ働き手がいないと仕事が成り立っていかないので、働き手にとって魅力的な場所になるよう取り組みを続けていきたい。

### 〈後藤准教授〉

働き方に関して意外とネガティブな回答が多い。フリーコメントでその辺りはより具体的に出てくるかもしれないが、理由を探っていくことが重要である。高校生のワークショップではそこまでネガティブな言葉は出てこなかった印象がある。

### 〈ランド委員〉

20代、30代の回答者数は絶対数が少ないと思う。アンケートの提出方法はLINEで出来なかったのか。ワクチン接種の関係でLINE登録した人が増えたはずである。

### 〈高橋参事〉

期間が短い中で、紙に加えて、QRコードと英語で配付をした。今後は、LINE活用の方向も検討したい。

### 〈ランド委員〉

住民の40%ほど登録していると聞いたので、次回はぜひ活用してほしい。観光客が訪れることに対して前向きな意見が多いのは、ニセコ観光PR媒体を生業としている身として良かった。海外客に対して国内客より賛成意見が少ないのは、文化が違うところから来ている人たちが日本の文化を知らぬ間に色々問題と捉えられるような行動をしてしまうので、ルールを作って徹底

しなければならないと思った。

〈後藤准教授〉

それぞれ解決アプローチが違うので、異文化コミュニケーションの課題と、オーバーツーリズムの課題は分けた方が良いと考える。

〈岩崎委員〉

アンケートにはニセコ町らしい例を取り上げられると良かった。例えばリフトのことなどオーバーツーリズムに関する例を問いに出してもらったほうが、身近な回答ができると感じた。

観光業に対する働く場所としてのイメージは、自分もホテル業者であり、ネガティブな面を否定はできない。現時点で、ニセコの観光関連事業者で働く人々の就労満足度が低いのだろうなと感じた。もちろん良い面もあるのだろうが、ニセコで働くことの楽しさなど、観光関連事業で働く人たちのモチベーションをどうやって上げていくかが大事なのだと思った。

〈後藤准教授〉

高校生ワークショップでも観光関連事業者の給料については、上げた方が良いなど意見が出ていた。両親の影響もあるかと思うが、その辺と今回の結果はリンクしていると感じた。若年層が何かしら、就労場所としての観光産業に不安を感じているのは間違いなさそうである。

〈岩崎委員〉

企業努力ももちろん必要であるとは認識している。

〈後藤准教授〉

町として、この件で何か調査したことがあるか。

〈高橋参事〉

観光事業の従業員向けのアンケートは実施していないが、観光庁の持続可能な観光のモデル地区になった際に、観光事業者（雇用主）向けに環境配慮に関する調査を昨年度実施した。

〈後藤准教授〉

観光関連業界で働いている人々の満足度が低いと、観光の未来は難しいものになる。

〈谷田委員〉

若年層の観光関連業界で働きたい意向が低いのは残念だし真摯に受け止める。このエリアで観光客が増えたのはここ15年ほど、今の30代、40代は毎年観光客が増加する中で働いてきたため、給料増加の恩恵を受けてきた。今の20代は観光客数がピークを迎えている中で働き始め、現在はコロナ禍ということもあり恩恵を受けていないと思う。

〈高久委員〉

就職などでニセコ町外に出てからニセコに戻った人たちと、1回もニセコ町から出てない人によっても回答は変わりそうだと感じた。多くの外国人にニセコが旅行先として選ばれている中で、物価が上がり、人件費が上がっているのは為替の問題も影響していると感じる。外国人はニセコを安く感じていると思うし、ハワイなどのようにローカルの人たちには特別な施策等が

なければ、この問題は是正されないと思う。

〈後藤准教授〉

シンガポールは国民しか住めない安い住居などがある。最終的にはニセコ町住民の所得などが上がっていくことが大事である。

〈尾形委員〉

属性を見ると、観光産業に携わっている人が少ないと思った。リゾートエリアならはだが、町内中心部エリアと他地域では物価の価格差は年々広がっている印象である。町民と観光客のバランスをとるのか、価値観を合わせるのか、何かしら整合性をとらないと、将来やっていけるのかと町民の不安は広がっていくと思う。人材不足については、観光産業に若手が魅力に感じてない原因として長時間労働、休日、給料など諸条件がある。諸条件を上げていくには、企業が売上を増やして利益あげていかねばならない。そのためにも、やはり繁忙期と閑散期の差をなくすことが最重要と改めて思った。沖縄との比較は、ロケーションや業種や規模感が違うので比較は出来ないのでは無いか。ニセコと近いエリアの指標があると良い。

〈後藤准教授〉

物価の問題は深掘して行った方が良いと考える。また、季節雇用の件もニセコ町としての持続可能な観光指標に入れたほうが良いと考える。

単純集計にあるが子供たちに観光関連産業で働かせたくない親の影響も若年層の数値に影響していると考えられる。

〈菊井委員〉

観光業で働く人とそれ以外の人々をどう結びつけていくか、特に観光に対して悪いイメージの人たちをどう観光と結びつけていくのか、また、観光に対して悪いイメージの人たちが、今後、観光に関わっていくことはできないのかは真剣に考えたい。

ニセコ町の主要産業は農業と観光であり、観光にとっても農業はとても重要な産業であることから、ビジョンの中でこの関わりをどう示していくのかも考えたい。そもそも、観光業以外の方々にとって、観光との関わり方がわからない人が多いのかもしれない。観光客が増えると住民サービスが充実していくことなど確実に伝えていくことが重要である。働き手がニセコ町外に出ていくのは、観光だけではなく他産業でも魅力がなければ同じ状況になる。若い人が入社しないのは企業にとって危機的な状況である。人口を増やす上でも、若手がニセコ町で働きたい状態にする必要がある。

〈後藤准教授〉

人口増減で考えると、北海道内でもニセコ町は、移住者が多く、数少ない人口減少を防げている町である。ニセコビジネススクールでも30代、40代が多く集まるなど、特種な町であることは間違いない。若者達に、ニセコ町の魅力をどう伝えていくかが重要である。

〈下田委員〉

中学校にキャリア教育に行くと、そこで感じる学生の想いとアンケート結果に違いを感じる。今回はコロナ禍で実施したアンケートなので、観光は負け業界な印象が強い。だからこの結果なのだと思う。一方、ニセコ町は年少人口の増加率は高いので、移住者の仕事の状況はどうなっ

ているのかを掘り下げてみたい。

## ②ニセコ町における観光由来の二酸化炭素排出量 試算結果（速報）について（JTBF 岡本）

### 〈後藤准教授〉

観光振興ビジョンとCO<sub>2</sub>排出量との関わりをどう考えるか。例えば、観光客には公共交通機関を使ってニセコ町にお越しく下さいという方向にするのか。

### 〈高橋参事〉

考え方としては指標として入れたいが、まだ模索中である。やり方は公共交通機関のみならず、カーボンオフセットなども色々あるかと思う。今回のビジョンでは方法論の限定まではできないと考えている。CO<sub>2</sub>排出量の測定をどこまで精緻に出来るかも、今後精査する必要があると考えている。

### 〈若杉委員〉

ニセコはパウダースノー無しでは観光を語れないと思う。そうであれば、観光ビジョンの中で、雪と二酸化炭素との関係を入れないわけにはいかないのではないか。オフセットも制度化すれば、自主財源の確保にもつながる話なので考えたほうが良いと思った。

### 〈高久委員〉

企業や個人がオフセットする場合、国有林など国で管理しているものはどのように扱われるのか。

### 〈岡本研究員〉

例えば九州では、必ずしも自分が居住している自治体で完結しているわけではなく、自分の市町村以外の取組に対して支払うことも可能となっている。

### 〈高久委員〉

ニセコが保有している町有山林で、現在どれほどオフセットされているのか試算できないだろうか。事実上のどのくらいのオフセットがどうなっているのか、その数値がわかれば、町の誇りにつながると思う。

### 〈石黒委員〉

10年後のビジョンを考えると、行政計画のなかにCO<sub>2</sub>排出量に関する内容を入れる意味付けが重要だと思う。観光客の行動を変容させたいのか、町内事業者のメリットになるようなものにしたいのか、などである。また、具体的に公共機関を使うなど、CO<sub>2</sub>排出量を抑える方法はあるが、町としてどうやって観光客にアプローチするか、政策としてどこまで面倒見るか、範囲を決めていくのは大事である。例えば、新千歳までどのような手段で来るか、新千歳からニセコまでどのような手段で来るか、までは町として関与しきれないと思う。

### 〈後藤准教授〉

ふるさと納税などでカーボンオフセットを活用手法もあると思う。

### 〈若杉委員〉

Jリーグなどは観客の移動や観戦後行動などを全て把握して活用しているようだ。

〈後藤准教授〉

携帯電話会社の移動データがあれば可能かと思う。

〈高井委員〉

企業としてカーボンオフセット商品を販売したとして、その料金を預ける、委託する役割の組織体はニセコ町にあるのか。ニセコ町にあると、例えば植樹イベントなども実現可能であり、子どもたちも参加できるのは良いと思う。

〈後藤准教授〉

現状はそのような組織はないので、ニセコ町でも検討しても良いと思う。

〈岡本研究員〉

カーボンオフセットは、専門の認証を受けた事業者が必要である。

〈後藤准教授〉

今回の審議会開催予定は2月だが、そこではある程度完成したものを審議する必要があるの  
で、その前に皆さんの意見を聞くための場を設けさせていただきたい。12月に追加で審議会を  
開催できないか。アンケート結果の詳しい分析説明やニセコ町らしい観光持続指標を議論出来  
たらと思う。※全員の承諾を受け、12月7日に審議会を開催することが決定した。

〈大湊〉

観光振興ビジョンに関して、ニセコ高校観光リゾートコースの2年生～4年生に協力しても  
らい、「第2回ワーククシヨップ」を開催した。「10年後、ニセコ町をどんな持続可能な観光地  
にしたいか」をテーマに、観光客、住民、観光事業者それぞれの立場で3つの視点で議論、最後  
には考えたことを全て実現できているニセコ町にキャッチフレーズをつけるとしたらどのよう  
なものが良いかを議論した。

出てきた意見としては、「街灯がもう少し増えて明るい道になってほしい」など学生たちが身  
近に感じている問題から、観光業における初任給の話まで多岐に渡った。補助金の話も出るな  
ど、学生たちにとって観光業で働くことなどは、想像以上に身近な問題なのだと感じた。1回目  
の同様に、ワーククシヨップの様子はニュースレターという形で町民に公開する予定だ。

5 その他

事務局から、第4回審議会に関するお知らせ、交通費支払いに関する説明があった。

以上